曇り日

水野仙子

鬢の後れ毛を掻きあげる氣力もなく、頽れた島田の重さがいよ〳〵早子の氣を沈ませた。それをぢいつと見まもつて居るやうな夫の態度が、また早子には又となく寂しいのでもあつた。新しい箪笥の上に置かれた鏡の面に、窓の外の林の緑りが映つて、稍々青褪めて覗く早子の頰は、この日頃の疑惑にやつれて見えた。

『どうかしたのかい？』

時たま夫はかう言つて訊く。

『いゝえ。』

けれども早子は僅かに唇を動かすに過ぎなかつた。

重ねては問はぬ夫が、『どうしたつていふんだらう！こんなぐじ〳〵した女ぢやなかつた筈だ！』といふやうに默つてしまうと、早子はまたそれが悲しくなつてかすかに唇がふるへて來る。そしては強いても優しく問うて呉れない怨みに、ます〳〵意古地に心が固くなつて行く。暫くすると、

『ね、何か僕に不平でもあるの？』

『いゝえ。』

『あれだ！』と思ふやうな目付きを感じながらも早子は猶かう答へる。

『ぢやあ體でもわるいのかい？』

『いゝえ。』

煙草の煙りが輪になつてのぼる。

『なんか不平があるならはつきりさう言つて、しまつたらいゝぢやないか。さつぱりするよ。』

『……』

『それともこんな貧乏世帯は厭だつていふのか……それならそれで今のうちならまだどうにでも なるからね。後悔されるのも無理はないさ！　體がまだほんとに快くなりもしないうちに一緒になつたのが間違ひなんだよ。さうは思つたんだけれど……。』

夫の顔も青褪めて居た。神經がその削げた頰をひきしめて居る。

『……泣いてるのかい？……』

掻き拶られるやうな不愉快に曇つた聲が、早子の心

にぴり／／と響いた。すると新しい涙が熱く瞼を溢れた。

つと立つて行つた夫の足音が書齋にはいると、張りのぬけた心に湧きあがる悲しさが、後から／／と啜りあげる声を洩した。涙が、夫の驚きをも憐愍の情をもそゝり得なかつたことがます／／果敢なまれた。

『もうどうせ！……もうどうせ！……』

と聲を胸の奥に絞つて、悲しい諦めの氣分に涙を納めようとするけれど、さうすればするほど、吾身を愍れむの思ひが止めどもなく堰きあげて來て泣けば泣くほど涙は涙を喜んで流れた。

茶の間の窓の外に續く楢林が、若やいだ緑りに朝の氣を吸つて、午後となれば日影がその枝の揺ぎを障子にうつした。その六疊だけにこの家の生命を置いて、樂しい、新しいものを待つ怡びの心から借りた家も、病み上りの主人の褪せた唇の色が、愉悦の影を潜めた女の暗い目色から、日蔭のやうな空氣に浸されて居る。

『おやすみなさい。』

かう言つて早子は、脱ぎ捨てをたゝみ、青い蚊帳の裾を捌いて異つた部屋の一つの寢床にはいつて行く。

薄目に灯した洋燈の光りに、寢返りを打つ白い寢卷が蚊帳の中に時々動いた。

ちろ／／ちろ／／と林の中に虫が鳴く。

探り合ふやうな心の一つが、やがて微かな寢息になつて行くと、早子は急に心の張りが弛んで、深い溜息と共に自分も眠りに落ちようと強いて目をつぶつて見る。

――幻影のやうに動く女の形ちがあつた。その姿は美しかつた。それが曾て見た人のやうでもあれば、見究めようとすればまたしの顔は目鼻のない、ぼんやりとした輪廓のみであつた。

『あゝ五年、五年とは隨分長き年月に候。その五年の間を亡き夫に捧ぐるの微志といたし、第七回忌の法要を快く済ませてのち、悦んで、別れを告げ申したく、その時より初めて再び身心共に獨身の身と相成り申すべく、新しき生活は如何にしても五年の後ならでは營み難く候』

『七日の夜十二時を過ぎて、様々の雜念をはらひ退け凡そ三十分ほどもたゞ諾か否かに就いてのみ考へ居り候。その折、貴方ともそれとも定かならねど、た

しかに併しその人の我が前に現はれて、暫し立盡(たちつく)し居り候。それをじいつと見て居り候ほどに、いつかその人は高き〳〵美しの塔に變りゆき候。しかるところにまた一人の人の現はれて、登れよ！　とばかり私を導いてその美しき塔に登りゆき候。そは夢にてもなく、また現にてもなく、見えしが如く感じられしが如き一つ幻覺にて御座候へし。私の心は躊躇もなく諾と定め申し候。』

『靜かなる靜かなる夜に候。書きつゝ涙をぬぐひ、今また筆を擱(お)かんとしては、彼を思ひ是を思ひて、この身は無限の幸ひのうちに溶け入る如き、心地のいたされ候。』

強く痛く胸を衝(つ)いた言葉の節々が、三尋(ひろ)にあまるやうな卷紙に運んで行つた美しい手蹟(しゆせき)が、浮彫のやうに早子の目に浮んだ。さま〳〵な想像はそれからそれへと續いて、いよ〳〵冴えて行く頭に虫の音がヂイエイエと響く。

繪を畫(か)く人で、さういふ若い未亡人の友達があるといふことは早子もとうから知つて居た。その人が繪葉書にかういふことを書いて來たとか、ダリヤの花を持つて來て呉れたとかいふことは、たび〳〵二人が會つた時の話題によく男の口から洩れた。その言葉の裡(うら)にほのかな匂ひを女は嗅がないでもなかつたが、それは併し二人が戀(ラブ)の物語を一層綾あらしめた挿話(エピソード)であつたその頃二十の未亡人は美術學校の生徒であつた。

取決めた結婚の日間際になつて黄疸(おほだん)を病んだ夫が、三週間あまりを病院で暮した上、明日がその日といふ時になつてやう〳〵退院することが出來た。兎に角式さへ濟してしまへば、あとはゆつくり看護をさせることが出來るからといふ、譯(わけ)のわかつた早子の伯父の言葉に從つて、日比谷の廣間に座つた夫の顔は青かつた。その華かであるべき筈の、新しい生涯の最初の日が、そのやうな寂しい氣分で彩られたばかりでなく、勝(すぐ)れない氣分がさせる不機嫌かは知れないが、戀しい人であつた時代には見せなかつたやうな我儘を露(あら)はにして手を一つ取つて二人がかうなつたのを喜んで呉れようともしないのを早子は物足りなく思つた。

初め自分から殊勝らしく言ひ出して、女中もなるべくは使はないことに決めたので、朝は僅かな物音にも直ぐに目が開(あ)いた。粥を煮たり乳を沸かしたりするこ

とにも隨分手間が取れた。そして出來損ねたり煮えこぼしたりした時に、一寸でも厭な顏をされるのが早子には怨めしかつた。

電車に乘つて病院まで藥を取りに行くのには、どうしても丸半日を潰さなければならなかつた。薄暗くなつた臺所に、かち〳〵と皿の音などするのは吾ながら寂しかつた。雨戸をさしに縁側に立つた時など、手水鉢の上にふら〳〵と揺れる手拭ひの風が、初秋らしいひや〳〵した氣を運んで、遥かに黒く蟠つて居る高見の上にちら〳〵瞬く街の灯などを見ると、こみあげるやうに昔懐しさの思ひが湧いた。

伯父が道具屋から眞直ぐに運ばせた早子の箪笥が來た日、その新しい木の匂ひに久しぶりの嬉しさをそゝられて、行李の始末をしたり、火鉢の置場所を替えたりした揚句、早子は夫のテーブルを整理する氣になつてその引出しに手を掛けた。下宿から此家へ運んで來る時は、何も彼も詰め込んだまゝになつて居るのを、殘らず引出して早子は一々珍しさうに撰り分けて行つた。折れた端書の一枚も一包みの藥の殘りも、一人の人の生活の斷片であることが面白かつた。

早子は何氣なく一つの新聞紙包みを開いて見た。その時ふと何やら不安な氣が萌したのであつたが、無造作にくるまれた一束の手紙がそこに廣げられた時、早子は思はず力の萎えたやうな兩肢を支へかねて椅子に腰を下した。さうまで親しくはなかつた筈の人の手紙ばかりが、そんなに澤山一纏めにしてあるといふことが、直ぐに早子にあるものを感じさせた。鼓動の激しくなつた胸の反比例には、豫期して居たことを認めるやうな微かな微笑みもその顏に泛んだ。

二人が散歩から歸つたあとに書いた手紙もあつた。男の留守にその下宿の縁に腰をかけて待ちながら書いた鉛筆の走り書きもあつた。返事のないのを待ち兼ねて出した手紙やら、贈り物に添へた手紙やらの中に、男が戀を明かしたその前後の手紙を見あてた時、早子は鐵槌に打たれたのでもあるかのやうな響をその頭に經驗した。豫期は豫期でも、それは男の口吻によつて察して居たやうな、女の片戀であるべき筈の豫期であつた。それだのにその幾通かの女の手紙はみな、男から打明けた戀に燃える返しの言葉なのであつた。

早子は胸の痛さに堪えられなくなつて、そのまゝ纏

めかけたが、見殘すのも恐ろしく、もつと〳〵の胸痛い事實を發見するのもまた怖しくて、封筒を出したり入れたりして暫くはその手紙の束を持て扱かねた。

くわつと燃えたつた血の反動に、恐しいほど冷靜な頭に間もなくかへつた。熱を病んだあとのやうな疲勞が、思ふ通りな運動を四肢に拒んで、すべての神經は劃かれたその問題に就いてのみ働いた。強い大きな刺激に縮萎んだ判斷力は、自づとその力を回復して來てやがて幾倍も〳〵の廣さのうちにすべてを包んでしまつた。

恐しいほど顏の筋肉の引き締つた、そして血潮の流れを阻んだやうな色の頰と唇を、夫はその日病院から歸つて來て早子の顏に見たのであつた。

早子のものを言はない日が一週間も續いた。それはほんとに暗い〳〵日なのであつた。

『貴方ねえ。』

或日早子は、默つて起つて行く夫のあとに隨いて書齋にはいつた。そして椅子に腰を下したその後から、夫の肩のあたりをいぢくりながらもぢ〳〵として何事かを言ひ淀んで居た。

『なんだい？』

何かを豫覺したやうに、夫は振り向きもしずに沈んだ聲でかう言つて腕を組んだ。

二人は暫く無言のままに相對して居た。

『ね、なんだいてば！』

『……』

『おいひよ』

『あのねえ……』

『むゝ。』

『貴方ほんとうに私と結婚なさるお積りなんでしたの？』

『不笑しなことを聞くね、もう式を擧げてしまつたぢやないか？』

『だつて……だつて……』

早子は涙ぐんで居た。

『何故そんなことをいふの？』

靜に夫は椅子を廻して早子と向ひ合つた。あれもこれもと言ひたいことが澤山あるけれど、どう言ひ出したものかと惑う心に、何やら怨めしさも手傳つて、早子は捗々しく返辭も出來なかつた。

『ね、何故そんなことを聞くんだい？』
『……』
『なんかつまらないものを見たんだらう？』
　早子は思はずびくりとしたが、默つて合點〳〵をした。
『多分さうだらうと思つてた。』と夫はそれで少し元氣を得たやうにはつきり言つて、
『何も心配するやうなことはないんだよ。ね。どうしたつていふの？』と珍しく優しく早子の手を取つた。
『私ねえ。』
『あゝ。』
『…手紙を見たの。』
『Sのをかい？』
　早子は默つて首を下げた。
『それで？』
『あの中に五年問題つていふのがあるでせう。』
『あゝ。』
『あれはどうなすつたの？　あの…貴方約束を反古（ほご）になすつたんぢやないんでせうね。』
『馬鹿をお言ひよ。僕がそんな男と思つてるのかい？あれはなんでもないんだよ、そのまゝになつてしまつてるんだよ。ね、なんでもないあれつきりのことなんだよ。』
『……』
『まだ疑つてるの？』
『それだつて、もしもSさんがほんとに待つてらしつやるんだと…』
『馬鹿だね、あの女はもうとつくにお嫁入りをしてらあね。』
『ほんとう？』
『あゝ。』早子は目を瞋（みは）つて何事かを讀まうとするやうに疑乎（じつ）と夫の顔に見入つた。
『過去のことぢやないか、ねえ、今まで默つてたのは僕が惡いけれど、併し遠からずそのことは早ちやんにも話（はなし）しようと思つてたんだ。それが遲かつた爲（た）めにこんな…何かい、それで毎日〳〵あんなつまらない顔ばかりしてたのかい？』
　早子はまた默つて肯（うなづ）いた。
『馬鹿だね、でも僕も惡るかつた、早くさう言つて置けばよかつたんだのに、つい臆病だつたものだから…

：それつていふのも、結婚前にそんなことを言つたら早ちやんが僕から外れて行きはしないかと怖れたものだから……。』

思ひの外(ほか)に優しく出られたので、早子は張りつめて居た心も弛み、まだ何處かに殘つた疑惑は抱きながら、この日頃の寂しく悲しかつたことが思ひ出されて、うす甘い悲しさが胸一つぱいになつた。

『私ねえ、毎日〳〵そのことばかし考へてましたわ、お互にもう結婚のことは公(おほや)けになつてるのだから、今更どうかうする譯にもいかないから、なんでも私の胸一つに收めて、私がひとりで誰にも默つて身をひかう思つて……そして私は一生ひとりで、遠い〳〵ところへ行つてしまはうと思つて考へてたの！』

『早(はや)ちやんも隨分空想家だね！……』かう言つて夫は、自分の作つた物語の哀れさに泣いて居る早子を跪(ひざまづ)かせて、その頭を自分の膝の上に乘せた。

『堪忍おし、ね、堪忍おしよ。』

優しいその言葉と、脊(せ)なを撫でる掌(てのひら)の暖かさが感じられると、早子は益々しやくりあげて、心行くばかりの涙を夫の膝の上にそゝいだ。そしていつまでも〳〵そのまゝの姿勢を動かさうとはしなかつた。

【入力者注】底本は総ルビですが、ふり仮名は一部のみ残しました。

以下の修正を行いました。

30上12　綴り→啜り
31下7　それからそれへて→それからそれへと
33上3　い書た→書いた
34下18　行頭に『を補う
35下18　姿動→姿勢

底本：「婦人評論」大正二年八月十五日号
テキスト入力：小林　徹
公開：令和三年一月三十一日
改訂：令和六年四月七日

リンク：「作品年譜」
水野仙子ホームページ